

感動詞「ええ」について

— ドストエフスキー『悪霊』の翻訳から —

村上真波

1. はじめに

「ひょっとしたら、完全な失敗じゃないんですか、ええ？」

「ええ、この酔っ払い野郎めが！」

(『悪霊』下 (ドストエフスキー著、江川卓訳))

ドストエフスキーの小説『悪霊』内で散見される感動詞「ええ」の用例のうちには、先行研究で言及されている分類に当てはまらないものが存在する。本稿では、感動詞「ええ」のうち、文学作品中に散見される「ええ」について調査を行い、感動詞「ええ」の全体像をつかむことを試みる。

2. 先行研究

文学作品における登場人物のセリフは、「作者によって書かれたもの」である文字言語でありながら、作品の中では「登場人物が話したもの」でもあることから、文字言語であると同時に音声言語の性質も持ち合わせているのではないかと考えた。

感動詞「ええ」について富樫(2005)は、発話時のイントネーションという観点から「3種の『ええ』の機能を、『ええ』が持つ固有の機能と3種のイントネーションとの組み合わせによって生じる合成的なものである」ととらえ、それぞれ「肯定の『ええ↓』」「問い返しの『ええ↑』」「検索の『ええ→』」として分類、統一的記述を試みている。「問い返しの『ええ↑』」については「専ら対話のみに用いられる」とする田窪・金水(1997)の指摘に疑問を呈し、独り言の状況や発話途中で用いられる場合など、対話という場面に制約を受けていない使用例を示し反駁している。

これらの先行研究は前提として音声言語が研究・調査の対象となっており、文字言語は考察に含まれていないようである。そのため、音声言語での使用頻度が少ない用法、及び怒り・悲しみなど日常での出現度が低い感情や特定のシ

チューエーションで使用される用法は、考察から漏れている可能性が考えられる。文学作品中には、先行研究のどの分類にも当てはまらない用例が散見されたため、新しく分類基準を設けたうえで考察を進める。

3. 用法の整理

結論を先取りして示すと、本稿において用いる分類枠は以下の表1の通りとなる。

(表1)

田窪・金水 (1997)	富樫 (2005)	筆者
応答1	下降調イントネーション 肯定	他者肯定・他者承認
		自己肯定・自己承認
意外・驚き	上昇調イントネーション 問い返し	驚き・聞き返し
		念押し a
		念押し b
		苛立ち・憤り
言い淀み系	高平調イントネーション 検索	検索

このうち、「他者肯定・他者承認」「自己肯定・自己承認」「驚き・聞き返し」「検索」は、すでに先行研究で言及されている用法である。

肯定・承諾の意を表す「ええ」について、他者の発話を受けて現れたと考えられるものを「他者肯定・他者承認の『ええ』」、自身の発話を受けて現れたと考えられるものを「自己肯定・自己承認の『ええ』」とする。

また、相手の発話を受けたうえで相手に説明や再発話を促す聞き返しとしての機能などを持っているものを、「驚き・聞き返しの『ええ』」、言うべき言葉を探している最中に場つなぎ的に使われるものを、「検索の『ええ』」とする。

次に、先述したどの分類基準にも当てはまらず、先行研究にも言及が見られない用法について、これらを分類・整理するために設けた新たな分類基準について述べる。

(1)

「ときに、ヴェルホーヴェンスキー君、きみは高等警察のまわし者じゃないのかね、え？」

「そんな疑問を心にいだいている人間は、それを口に出したりはしないでしょうよ」

「驚き・聞き返し」の用法は、「相手の音声そのものが雑音や発話不鮮明等の障害により一部または全部聞き取れなかったことを表明するもの」（田窪・金水（1997））であり、相手の発話を前提としている。しかし(1)を見ると、発話者は相手に質問を投げかけ、念押しをするように再度問うことで相手の返答を促しており、「ええ？」は相手の発話を受けて現れたものではない。このように念を押すように相手に問うことから、この用法を「念押し」の用法とし、本稿ではこれをさらに二つに区別する。以下に分類枠と分類基準を述べる。

(2)

「これはきっと、あの将校から押収したやつでしょう、ええ？」ピョートルはたずねた。

(2)のように、疑問符や感嘆符を伴い、文末に現れる念押しの用法を、「念押しの『ええ』a」とする。文末に現れることで、相手に強く返答を促す役割を果たす場合が多い。

(3)

「こりゃ、きみ、純然たる人権侵害だよ。いったいきみは何をばくに要求するんだね、え、何を、何を、はっきりいいたまえ」

(3)のように、疑問符や感嘆符を伴わずに文頭や文中に現れる、発話の短い念押しの用法を、「念押しの『え』b」とする。疑問符や感嘆符を伴わないこと、「念押しa」のように文が終わらず後ろに発話が続くこと、感動詞自体が「え」と短いことなどから、比較的「念押しa」よりも念押しの程度が軽く感じられる点が特徴である。

これら「念押し」とはまた違った用法も見られる。

(4)

「わたしは、一文だっておまえにやりやしないよ。は、は、は！ は、は、は！」

「ええ、この白痴女め！」ニコライは、なおも彼女の手をきつく押えながら、きりきりと歯がみをした。

(4)のような「ええ」は、相手の発話が必要なく、独白や独り言の際にも使用可能であるという特徴が、「自己肯定・自己承認」や「検索」の用法と類似しているが、その点以外は先述したどの用法・基準にも当てはまらない。肯定や承諾、意外や驚きの意は示しておらず、言うべき言葉を探しているわけでも、言い淀んでいるわけでもない。怒りやもどかしさ、苛立たしきなど、マイナスの感情とともに現れることが多く、対話を断ち切ったり、自身の苛立ちを表現したりするために発話される点が特徴である。この用法を、本稿では「苛立ち・憤り」の用法とする。

4. 調査①——年代による「ええ」の使用の差、及び別表現について

一つの海外文学作品は、時代とともに何度も翻訳し直され出版されることがある。同一作品から生まれた複数の翻訳本を比較することにより、日本語の変遷をつかむことができるのではないかと考えた。そこで、文学作品中に散見される「ええ」について、年代による使用の差が見られるかを調査する。

本稿では、海外文学作品であるドストエフスキーの長編小説『悪霊』を対象とし、およそ40年ごとの傾向が見られるよう、それぞれ年代の異なる三種類の翻訳本を使用する。以下に使用翻訳本の年代を示す。

- A. 米川正夫 (1891-1965) 訳 (1934年頃)
- B. 江川卓 (1927-2001) 訳 (1971年頃)
- C. 亀山郁夫 (1948-) 訳 (2010年頃)

これらの各翻訳本から感動詞「ええ」を抜き出し、用法ごとに集計・分類したのち、収集された用例の数や割合を比較することで、年代による変遷をつかむを試みる。

ここで『悪霊』の異本について触れておく。『悪霊』には、ロシアで連載されていた当時、編集長が掲載を拒否したために削除された、いわゆる「スタヴローギンの告白」と呼ばれる章がある。校正刷版、校正刷に作者が手を入れた版、そしてドストエフスキー夫人であるアンナ・グリゴリエヴナが筆写した筆写版のように、さまざまな版が存在するが、このことが正確なデータ収集の障壁となりかねないと判断したため、4.の調査①、5.の調査②を含めた本稿にお

ける調査対象からは除外することとする。

収集された感動詞「ええ」の用例数は、A:米川訳で200例、B:江川訳で101例、C:亀山訳で125例となった。分類の結果をまとめたものが表2である。なお、翻訳本により感動詞「ええ」全体の用例数が異なるため、全体の用例数における各用法の割合を百分率で示した。

(表2)

	A：米川訳		B：江川訳		C：亀山訳	
他者肯定・ 他者承認	59	29.5	46	45.1	76	60.8
自己肯定・ 自己承認	30	15.0	5	4.9	6	4.8
驚き・ 聞き返し	32	16.0	11	10.8	15	12.0
念押し a	18	9.0	9	8.8	13	10.4
念押し b	20	10.0	0	0.0	0	0.0
苛立ち・憤り	31	15.5	27	26.5	4	3.2
検索	0	0.0	0	0.0	5	4.0
(分類困難)	10	5.0	4	3.9	6	4.8
合計	200	100.0	102	100.0	125	100.0

ところで、別表現の調査では三種類の翻訳本を使用するため、同一場面にそれぞれ3例(A、B、C)の訳文があることになる。ある翻訳本で「ええ」が使われていても、別の翻訳本では「ええ」以外の表現である場合がある。同一場面において三種類の翻訳本が揃って「ええ」を使用していることもあれば、一つの翻訳本しか「ええ」を使っていない場合もあるが、本稿では3例で1場面として数える。合計で299場面、897例の用例が対象となった。

5. 調査②——ロシア語との照合

次に、調査①で分類した用例をもとに、当該場面に対応するロシア語との照合を行う。テキストとして、ロシア語版ドストエフスキー『悪霊』(『Бесы』Ф.М. Достоевский; [редакторы X тома В.Г. Базанов, Т.П. Голованова] Ленинград: Изд-во“Наука” Ленинградское отд-ние, 1974, 愛知県立大学図書館所蔵)を使用する。ただし、本稿の調査で使用する各翻訳本の底本は明らかではない

が、調査範囲の中では上記のロシア語版および各翻訳本で大きな場面の異なりなどは見られないため、本稿での調査は成立しうると考える。

調査②で扱うロシア語の用例数をまとめたものが表3である。

(表3)

他者肯定・他者承認	118 場面
自己肯定・自己承認	37 場面
驚き・聞き返し	37 場面
念押し a	24 場面
念押し b	20 場面
苛立ち・憤り	40 場面
検索	5 場面
(分類困難)	18 場面
合計	299 場面

6. 考察

「ええ」に関する集計結果(表2)、ロシア語に関する集計結果(表3)に加え、各節に掲載する別表現の集計結果から分類ごとに考察を進めていくが、本稿では先行研究で言及されていない「念押し a」「念押し b」「苛立ち・憤り」の用法について詳しく見ていく。

6.1. 念押しの「ええ」aと別表現

「念押しの『ええ』a」、及び別表現の集計結果を表4に示す。合計で24場面、72例の用例が対象である。なお、「ええ」の用例には「ええ」の他に「ええっ」「え」を含む。これらの異なる語彙については、年代による特定の語彙パターンへの偏りが見られないこと、同訳者が複数のパターンを使用している場合があるものの意味上の差異が見受けられないこと、ロシア語原文中においてほとんどが同じ語と対応していることなどから、本稿では一つの用法として考える。

(表4)

A：米川訳			B：江川訳			C：亀山訳		
ええ	…18例	75.0	ええ	…9例	37.5	ええ	…13例	54.2
別表現合計	6例	25.0	別表現合計	15例	62.5	別表現合計	11例	45.8
24 場面								

(5)は、すべての翻訳本において「ええ」「え」が使用されている例である。

(5)

A:「ダーリヤさん、どうか赦して下さい！……いったいお父さんは僕をなんという目に合わせたんだい、え？」と彼は父の方へふり向いた。

B:「ダーリヤさん、どうぞ許してくださいよ！……それにしても、いったいほくをなんという目に合わせるのさ、え？」彼は父のほうを振向いた。

C:「ダーリヤさん、どうか、ほくを許してくださいよ！……こんなことになるなんて、父さん、ねえ、なんてことをしてくれました、ええ？」そう言って彼は父親のほうをふり向いた。

「ええ」の用例数は、B：江川訳で一度減少しており、B：江川訳以降で減少している用法であると捉えられなくもないが、C：亀山訳でも一定数使用されており、現在でもある程度は通用する用法であると考えられる。

別表現としては、「ねえ」「ね」「でしょう」「そうでしょう」「どう」「どうです」など数種類の特定のものが使用されることが多い。以下に一例を挙げる。

(6)

A:「——あなたがどんなに僕を疑っても、僕は決してこの事件に罪はないんですよ。だって、実際あなたは僕を疑っているらしいんだものね、そうでしょう？」

B:「正直な話、きみがどんな嫌疑をかけようと、この点じゃ、ほくは潔白ですよ、だってきみは、たぶん、ほくを疑っているでしょうからね、でしょう？」

C:「正直言って、ほくをどう疑おうと、これはほくに責任があるわけじゃない。——だって、きっとほくを疑っておられるんでしょう、ええ？」

これらの別表現に大きな年代差は見られないものの、時代とともに細かなニュアンスや感情がより伝わりやすい言葉に置き換えられ、表現の種類も増えている。

「念押し」の『ええ』a)に対応するロシア語は「a?」が多く、24場面中21場面にのぼる。また「так ли?」「или нет?」などの疑問文や挿入句なども見られる。

特徴としては、全ての場面においてロシア語版にも何らかの表現が存在する

という点が挙げられる。「念押し a」の用法が、ロシア語圏においてはなじみ深い一方、日本語訳では対応する表現が欠けている（○）場合もあるため、「日本語では表現がなくても意味が通じる場合がある」「日本語では表現が欠けている（○）方がより自然である」と言えよう。

6.2. 念押しの「え」bと別表現

「念押しの『え』b」、及び別表現の集計結果を表5に示す。対象となったのは、合計で20場面、60例の用例である。

(表5)

A：米川訳			B：江川訳			C：亀山訳		
え	…20例	100.0	え	…0例	0.0	え	…0例	0.0
別表現合計	0例	0.0	別表現合計	20例	100.0	別表現合計	20例	100.0
20場面								

先掲の表2に加え、表5からも分かる通り、「念押しの『え』b」は、A：米川訳以外に用例が見られない。B：江川訳、C：亀山訳では表現が欠けている（○）ことが大半で、それぞれ16例、12例見られる。別表現としては6.1「念押しの『ええ』a」に見られた言葉である「どうです」「そう」「そうだろう」などが1例ずつほど見られるものの、統一性があるとは言えない。以下に一例を挙げる。

(7)

- A：「え、ニコライ・フセーヴォロドヴィッチ、お互いに個人的にわたる話はやめようじゃありませんか、え、今後永久にね？」
- B：「どうです、スタヴローギン君、おたがい、個人的な話はやめようじゃないですか、(○) 今後、永久にね」
- C：「あのね……スタヴローギン君、個人的なことについて、口だしするのはやめにしましょう、これっきり二度と、いかがです？」

全体として、「え」によって念押しのニュアンスが表現されてはいるものの、疑問符や感嘆符を伴う「念押し a」の場合に比べて比較的念押しの程度が軽く、訳出する必要性が低いため、年代とともに表現が欠けていったと考えられる。

しかし、単純にそうとも言えない例も見られる。特に(7)の例で注目すべきは、二つのうち後ろの例である。A：米川訳では「え、今後永久にね？」であり、「念押し b」の用法と合致する。B：江川訳では「今後、永久にね」となっており、「念

押し b」の「え」が欠けている。C：亀山訳では「これっきり二度と、いかがですか?」となっており、「念押し b」の用法は文末に移り、「いかがですか?」という言葉で言い換えられているが、これは、先の 6.1. で述べた「念押しの『ええ』 a」の用法である。「念押し」の用法の中でも、特に「念押し b」の用法が使用されなくなり、「念押し a」の用法に吸収されつつある可能性が考えられる。

また、ロシア語原文では「念押しの『え』 b」と対応するロシア語がない場合が大半であり、20 場面中 16 場面にのぼる。ここから、「念押しの『え』 b」は B：江川訳、C：亀山訳で訳出されていないのではなく、A：米川訳で加筆されているということが分かる。以下に一例を挙げる。

(8)

原文：-Связав меня преступлением, вы, конечно, думаете получить надо мною власть, (∅) ведь так? Для чего вам власть?

A：「こうして、犯罪で僕を縛りつけたうえ、君はもちろん僕に対して権力を握ろうと思ってる、え、そうでしょう? いったい君さんのために権力があるのです?」

B：「そうやって犯罪でぼくの手足をしばりつけておいて、きみは、もちろん、ぼくに対して権力を揮おうというわけだ、(∅) そうですね? なんのためにきみには権力が要るんです?」

C：「犯罪でもってぼくを縛りつけることで、あなたはむろん、ぼくにたいする支配権をにぎろうっていう魂胆なんだ。(∅) そうですね? なんのためにあなたは権力が必要なんです?」

A：米川訳の時代には加筆しないと文脈が取れないと判断されたが、のちの時代では不要になった、あるいはかえって「念押し b」の「え」が不自然なものになっていった、ということが推測できるだろう。

6.3. 苛立ち・憤りの「ええ」と別表現

「苛立ち・憤りの『ええ』」、及び別表現の集計結果を表 6 に示す。合計で 40 場面、120 例の用例が対象である。なお、「ええ」の用例には「ええ」の他に「ええっ」「ええッ」「えっ」「ええい」「えい」「えいっ」を含む。ここでも、年代による特定の語彙パターンへの偏りが見られないこと、同訳者が複数のパターンを使用している場合があるものの意味上の差異が見受けられないこと、ロシア語原文中において多くが「э」という語、あるいはその派生と考えられる「эх」「э-эх」「эй」という語と対応していることなどから、本稿ではこれらの語を一つの用法とし

て考える。

(表 6)

A：米川訳			B：江川訳			C：亀山訳		
ええ	…31例	77.5	ええ	…27例	67.5	ええ	…4例	10.0
別表現合計	9例	22.5	別表現合計	13例	32.5	別表現合計	36例	90.0
40 場面								

(9)は、すべての翻訳本で「ええ」「ええい」が使用されている例である。

(9)

A：「待ってくれ！ 僕は上の方に、舌を吐き出したつらを描きたいんだ。」

「ええ、くだらないことを？」ピョートルは業を煮やしてしまった。

B：「待て！ おれは上のほうに、舌をべろりと出した面を描きたい」

「ええ、くだらない！」ピョートルは怒った。

C：「待て！ ほくはこの上のほうにべろを出した人間の面を描きたい」

「ええい、ばかばかしい！」ピョートルはいきり立って叫んだ。

この分類の特徴は、C：亀山訳で「ええ」の使用が激減し、別表現での訳出が増加する点である。C：亀山訳でも4例「ええ」の使用が見られることから、完全に淘汰された用法ではないことが分かるが、「ったく」「まったく」10例、「いや」「いいや」4例、「ああ」3例など、種類豊富な別表現に置き換えられていることが分かる。

特筆すべきは(10)に挙げるような「ったく」「まったく」という表現で、A：米川訳、B：江川訳で1例見られるこの言葉はC：亀山訳では10例にのぼる。「苛立ち・憤り」の場면을訳す際、C：亀山訳では「ええ」系の表現ではなく「ったく」系の表現が多用されていることが分かる。

(10)

A：『あいつの手にピストルを握らせて、床の上に具合よくねかしておいたら、必ずやつが自分でやったものと思うに違いない……ええ、あん畜生、どうして殺してやろうかなあ？』

B：〈発射したピストルを手に握らせて、床の上にうまいところがしておけば、だれだって、自分でやったと思うさ……ええ、畜生、どうやって殺すかな？〉

C：《発射した拳銃を手に握らせ、やつの死体を床のうえにうまく転がしておけばいい。そうすりゃきつと、やつが自分でやったって思うにちがいない……ったく、あんちきしょう、どうやって殺してやるうか？》

「ったく」「まったく」は、現代においては音声言語でもよく聞かれる言葉であり、「ええ」に代わって苛立ちや憤りを表現する言葉として定着し、それが文字言語においても使用されるようになったと考えられる。

7. まとめ

調査①と調査②から、感動詞「ええ」についての考察をまとめる。

「念押し」の『ええ』aは、年を経るにつれて多少の減少が見られると捉えられなくもないが、現在でもある程度通用する用法であると考えて問題ないであろう。別表現としては「ねえ」「ね」「でしょう」「そうでしょう」「どう」「どうです」など、特定のものが用いられる場合が多く、感情やニュアンスがより伝わりやすい表現が増えている。ロシア語版中にも「a?」という語や「так ли?」「или нет?」などの疑問文・挿入句など、必ず何らかの表現が見られることから、ロシア語圏では非常になじみ深い用法であると言える。日本語に翻訳された際に訳出されず(○)、表現が消されている場合もあるため、日本語においては欠けていても通じる、あるいは欠けている方がより自然である用法の可能性が考えられる。

「念押し」の『え』bは、A：米川訳以外では見られないが、ロシア語版中にも対応する語がないことが大半であり、翻訳の際に加筆されていた用法である。語順を入れ替えるなどの工夫によって、「念押し」の『え』bの使用が避けられている、あるいは使用がされにくくなっているのではないかと考える。

「苛立ち・憤り」の『ええ』は、C：亀山訳で激減し、それに伴う別表現の増加が顕著である。使用される表現も種類豊富であり、特に「ったく」「まったく」という表現は「ええ」よりも多用されている。「苛立ち・憤り」の『ええ』は使用されなくなりつつある用法であると言えるだろう。

8. おわりに

本稿では、ドストエフスキー『悪霊』に散見される感動詞「ええ」についての調査を行った。感動詞「ええ」を用法ごとに分類し、三種類の翻訳本の比較、

およびロシア語版との照合から、感動詞「ええ」の変遷をつかむことを試みた。

本稿の方法の限界として、以下の点が挙げられる。ロシア語で「а?」「Ә」などの表現がなされていても、三種類の翻訳本のどれでも「ええ」と訳されなかった場面は、調査の対象から外れてしまっていることである。しかし本稿の目的は、日本語の「ええ」の表現を追究するのが主眼であったため、やむを得ないことであった。

また、さまざまな言語や作家、翻訳家の文章を対象とすることで、より本質に迫る考察が可能となるだろう。

これらの点を本稿での課題として残し、新たな調査を進める上での参考としたい。

使用テキスト

『悪霊』(一) ドストエーフスキー作：米川正夫訳、岩波書店（1934年3月5日第1刷発行、1959年10月5日第18刷改版発行）

『悪霊』(二) ドストエーフスキー作：米川正夫訳、岩波書店（1934年3月5日第1刷発行、1959年11月5日第16刷改版発行）

『悪霊』(三) ドストエーフスキー作：米川正夫訳、岩波書店（1934年3月25日第1刷発行、1959年12月5日第15刷改版発行）

『悪霊』(四) ドストエーフスキー作：米川正夫訳、岩波書店（1934年4月30日第1刷発行、1959年12月20日第13刷改版発行）

『悪霊』1 ドストエーフスキー：亀山郁夫訳、光文社古典新訳文庫（2010年9月20日初版発行）

『悪霊』2 ドストエーフスキー：亀山郁夫訳、光文社古典新訳文庫（2011年4月20日初版発行）

『悪霊』3 ドストエーフスキー：亀山郁夫訳、光文社古典新訳文庫（2011年12月20日初版発行）

『悪霊』上 ドストエーフスキー：江川卓訳、新潮文庫（1971年11月30日発行、2004年12月20日35刷改版）

『悪霊』下 ドストエーフスキー：江川卓訳、新潮文庫（1971年12月5日発行、2004年12月20日39刷改版）

『Бесы』 Ф. М. Достоевский; [редакторы X тома В. Г. Базанов, Т. П. Голованова]
Ленинград: Изд-во “Наука” Ленинградское отд-ние, 1974

参考文献

田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』くろしお出版

富樫純一（2005）「肯定・検索・問い返し——感動詞「ええ」の統一的記述を求めて——」『文芸言語研究 言語篇』筑波大学文芸・言語学系

（むらかみ まなみ）